

ってきた。休みなしでどんどん下る。5m程の滝がぼつんぼつんという感じとなり、それもなくなる。いよいよ中津川林道も間近だ。第16号橋到着17時55分。

(記。

下降開始(15:15)——第16号橋(17:55)

1981年8月9日

中津川

L

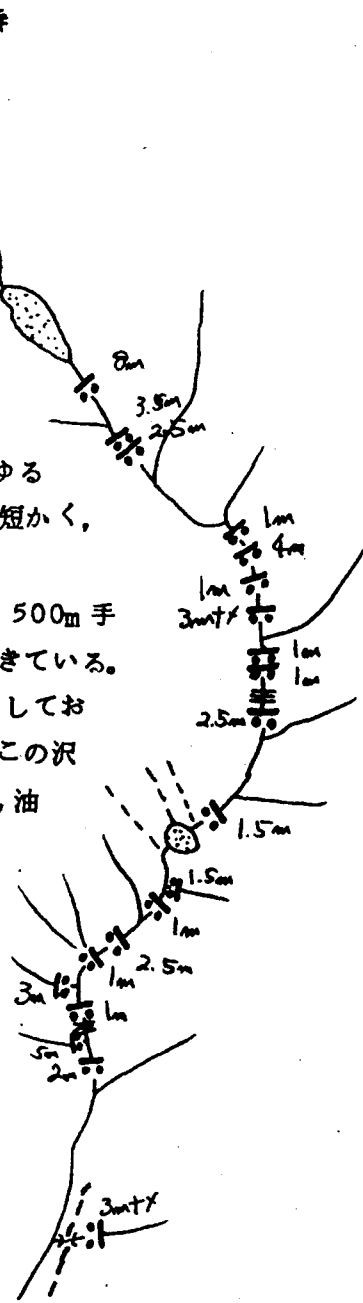
者

茂庭の沢の中では、鳥川とこの中津川が大きい。下流および中流部は営林署の林道がのび、ゆるやかな流れであるが、上流部は等高線の間隔が短かく、滝を期待しての遡行である。

6時45分福島発。8時10分に林道終点より500m手前に車を置く。地図にあるよりは林道は長くできている。

8時28分入溪。水は冷たい。木がうっそうとしており、滝の「におい」がする。間もなくF1 4m。この沢は水アカが多く、コケのついている所もあって、油断できない。小滝を過ぎ、ゴルジュが出てくる。意外に険悪だとうれしがらせる。続いて、F2 5m、F3 10mと、ナメをはさんで次々と出現する。茂庭の沢は、当たりはずれの差が大きい。この沢は兎事当りのようだ。F4 15m。今回で最も大きい滝だが、むずかしくない。小滝の連続を通過し、二俣に出た。我々は尾根一本左の沢を下降する予定にしていたので、左俣に入る。もう水量も少く、滝もかからないので、9時57分、遡行を打ち切り尾根に登る。

尾根10時10分着。10分も下ると沢に



柳沢(作図)

なる。まもなく10mの滝ほか2, 3の小滝を通過して、11時に本流に出会う。

本流の右岸には峠道（おそらく営林署の作業用道）と赤の電線が、平行して走っている。沢には倒木があり、歩きにくい。F5 10m。このあたりは、ナメと小滝の連続である。F4, F3, F2と過ぎる。コケが多いが、フリクションはよくきく。最後の出合まじかのF1 10mをクライミングダウンして今日の行動を終える。

（記・

遡行開始（8:28）——終了（9:57）——尾根（10:10）——本流（11:00）——
下降終了（12:15）

1981年6月21日

柳沢

L

沢と中ノ沢の合流点に車を置き、林道を歩く。前方にカモシカがいる。すかさず、西さんがカメラにとる。この辺はよくカモシカに出会います。天候はあいにく小雨。1時間歩いてもまだ林道が続きます。年々林道が奥へのびてゆくようです。

9:45 遡行開始。左右にいくつも小沢をわけつつ、本流には次々と小滝がかかるが、何なく越えてゆく。やがて前方にスノーブリッジがかかる。下を通らないで左岸よりを乗り越える。今年は雪が多かったためか、それとも異常低温のためか、残雪が例年になく多い。次の小滝をすぎた所で小休止。ヤマウドを採る。再度出発。再び小滝連続。ナメ、小滝と軽快に越えてゆく。もう源流部の装いである。やがて二俣。本流とみられるのは右俣だが、左俣には滝が見える。どちらをつめても良かったらうというので左俣に入る。

二俣から見えていた滝は中央やや右を直登する。小沢が入り沢が左へカーブしている所に、最後の滝、8m階段状の滝がかかっている。何だか沢の空気が冷たく感じられる。滝の上に登ると、「何と！」前方に雪渓が広がっているではないか。昼食をとって出発。雪渓はすぐ終わるだろうと思っていたら、その上にさらにもう1つ、合わせて500mにもなろうかという長さがあった。足は冷たくなり、頭の方まで冷えてくる感じだ。雪渓が終わった所からやぶこぎ10分で踏跡に出る。

豪士峠から続くこの踏跡、途中までははっきりしているが、伐採あと地——今ではブッシュがかなりのびているあたりから先が廃道化している。降りているうちに踏跡がわからなくなる。こうなりゃ面倒と、小沢伝いに柳沢めざして降りる。

（記・

な感じとなる。でも、下るしかない。

出発。「何か話声がしないか」「こんな所に人が来るわけないだろう」「クマかもしんないぞ」こんなことを言っているうちに2頭のクマに出会う。立ち止まった我々を尻目に、沢から尾根へゆうゆうとあがってゆくところだった。突然のハチ合わせをしなければおそわれることはないを知っているても、クマというといい気持はしない。

「クマが捲いていったんだから滝があるぞ。」と言っていたら、やっぱり滝が出てきた。しかも連続で出てくる。落差は15m位のが最高。いずれも若干ナメ状である。プッシュを利用したり、慎重にクライミングダウンしたりするが、3本だけはザイルをとり出して懸垂下降した。ミスアカがついていてすべりやすいが、登りに使うなら快適さが味わえそうだ。

今しがた崩壊したばかりの雪溪のそばを通る。もう滝も小型のものばかりとなり、前方の傾斜もゆるやかになってきたようだ。時間が気にな

